

上野の杜の 波瀾 万丈

第十回

東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 前篇 橋本久美子

太平洋戦争の最中、東京音楽学校の生徒が陸軍戸山学校軍楽隊に入隊する。戦後の音楽界を背負っていくことになる学徒たちの知られざる青春。

それは
一枚の張り紙から始まった

昭和十九年十月一日、東京音楽学校(以下、音校)生十四名が陸軍戸山学校(以下、戸山学校)軍楽隊に入隊した。敬称略、五十音順に、芥川也寸志(大正十四〜平成一、本科作曲部)、石津憲一(大正十三〜、本科声楽部)、伊藤榮一(大正十四〜、甲種師範科)、内田富美彌(大正十三〜昭和五十一、本科器楽部トランペット)、奥村一(大正十四〜平成三、本科作曲部)、北爪規世(大正十三〜、本科器楽部ヴィオラ)、梶原完(大正十三〜平成一、本科器楽部ピアノ)、齋藤高順(大正十三〜平成十六、本科作曲部)、鈴木良一(大正十四〜平成九、本科器楽部ピアノ)、團伊玖磨(大正十三〜平成十三、本科作曲部)、沼田元一(大正十三〜、甲種師範科)、早川博二(大正十四〜平成十六、本科器楽部トランペット)、萩原哲昌(大正十四〜昭和五十九、本科器楽部クラリネット)、藤島義勝(大正十四

昭和五十八、本科器楽部オーボエ)である。彼らの証言によれば、それは十八年十月の明治神宮外苑競技場における出陣学徒壮行会から半年経った十九年の四月頃、校内に出された一枚の張り紙から始まった(團は校長から呼ばれたと記す)。校長名で、徴兵検査を受ける生徒に対して、戸山学校軍楽隊への入隊希望者を募る内容であったという。

東京音楽学校と 陸軍戸山学校の交流

学内文書が確認されなかったため、本稿は『東京芸術大学百年史』既載の芥川、齋藤、團の文章、ご健在の四名(石津、伊藤、北爪、沼田、軍楽隊で音校生の二年先輩の内務班長・高澤智昌(大正十一〜)、澤野立次郎(本学同声会理事(昭和七〜)の談に負うところが大きい。

この背景には音校と戸山学校との交流がある。そもそも音校は明治四十一年以来、海軍省から軍楽練習生を受け入れて教授する一方、音校の

演奏会では海軍軍楽隊が管楽器パートに加わった。また戸山学校へは大正十五年以來、音校から杉山長谷夫(ヴァイオリン)、平井保三(チェロ)、高折宮次(ピアノ)を派遣した。そのレベルは戦後、軍楽隊からチェロの二名がNHK交響楽団に入団したことからも想像される。加えて、乗杉嘉壽校長(明治十一〜昭和二十二)が昭和六年に欧州視察した際、ドイツでは後の陸軍軍楽隊長・山口常光(明治二十七〜昭和五十二)と一緒に劇場見学をした。両者の十年以上にわたる交友が、音校生の集団入隊を可能にしたのである。山口は十九年三月から二十一年二月まで音校の「教職」の教務嘱託であった。

山口は最後の軍楽生徒について著書『陸軍軍楽隊史』にこう記す。杉山、平井両氏より、遠からず学徒動員で召集される音校生たちをいたずらに戦地に赴かせるのではなく、音楽技術を生かして戦争に協力できないものかとの申し入れがあった。それを受け入れた判断は間違っていないかった。

戸山学校は明治六年、士官・下士官の教官養成を目的に新宿区戸山、尾張徳川侯の広大な下

屋敷に創立。現在は都立戸山公園となり、「箱根山・陸軍戸山学校址」の碑がある。箱根山の麓にある六角形の石造りの野外演奏場跡が当時の名残を留めている。入校年の三月末現在で満十六歳以上二十歳未満若干名募集、入試科目は国語、作文、算術、地理、歴史、唱歌であった。入試は「身体検査が主体で、試験官がピアノの鍵盤を叩いて、受験生が同じ高さの声を出す程度の試験があった」と高澤と齋藤は語るが、音校生のほとんどは入試の記憶が希薄である。

軍楽生徒の修業期間はもとも二年であったが、十七年度は一年間、十九年度は八ヶ月に短縮され、卒業後は軍楽上等兵となった。「若干名」とあるが、明治二年の薩摩藩士三十名以來の氏名を記した『陸軍軍楽隊員名簿』によれば、十六年〳十九名、十七年〳五十二(入学時五十五、志願者数二千五百)名、十八年〳百名、十九年〳百十九(入学時百二十)名であった。

入隊の日、十四名は揃って新大久保駅で電車を降り、改札口を出る。待っていた女生徒たちの『海ゆかば』にしばし聴き入り、見送られて門をくぐった。



1. 出陣学徒壮行会 昭和18年10月21日 東京音楽学校の全校生徒が吹奏と合唱で参加。武蔵野音楽学校(現武蔵野音大)、東京高等音楽学院(現国立音大)の管楽器生も加わっていた(高澤談)。



2



3



4



5

2. 終戦当時の陸軍戸山学校(山口常光編『目で見える吹奏楽百年史』昭和46年)
地面の穴は焼夷弾の痕(高澤談)。同校は体育・武道・射撃・音楽の教育を行った。
3.「箱根山・陸軍戸山学校址」の碑と高澤智昌氏 平成22年7月18日撮影

4. 野外演奏場跡 平地部分に譜面台を立てて演奏し、周囲の傾斜地が観客席となった。
昭和18年初め頃には反響板も作られた(高澤談) 平成22年7月18日撮影
5. 山口隊長率いる陸軍記念日の行進(出典は写真2に同じ) 昭和20年3月10日

担当楽器が決まる

入隊後、担当楽器が決まる。音校で管楽器専攻の内田、萩原、早川、藤島はそのまま。伊藤は青山学院中学部の音楽部で吹いていたトロンボーン、沼田は本人の希望でテナーサクソとなる。管打楽器の経験がない場合は、芥川「私のように両方とも駄目な者は、背丈、面構えなどをジロツとらんで、どんどんきめていきます。その早いこと早いこと」。團「厳格な身体検査の後、上半身裸で一列に並ばせられた前を、前歯を見せろ、と言いなながらペテランの上官が数人で歩いて過ぎながら楽器を決めて行く」。

その結果、奥村(齋藤筆、沼田談)と梶原(高澤談)はオーボエ、鈴木(伊藤談)はクラリネット、齋藤はアルトサクソ、芥川はテナーサクソ、北爪と團は小太鼓と決まった。石津のようにトロンボーンを申し出て始めたが、「喉は大丈夫か? 小さなテューバの管が楽だぞ」と言われ変更になったケースもある。入隊時より歌の要員と考えられていたのであろう。

(次号につづく)

(はしもと・くみこ／音楽学部講師)

次号予告

東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 後篇

軍楽隊に入隊した十四名はどのような生活を送ったのだろう。また学徒出陣以降の東京音楽学校はどうであったか。さらには学徒たちの戦後をたどる。